

# 平安期神楽歌謡文献からみる 「平仮名」の位置

山 田 健 三

## 1 はじめに

本稿は、平安期の日本語書記システムに関する従来の理解について、新たな視点から捉え直そうとするものである。特に「仮名」「平仮名」に再考すべき点のあることを、平安期の神楽歌謡文献を用いて、述べる。(なお、本稿の主張については、既発表論文と重なるところがある。これについては「付記」をご覧ください。)

## 2 「かな」と「ひらがな」

「平仮名は平安時代に生まれた」という理解は、一般的にはもちろん、学術シーンにおいても永らく、そして広範に通用している。しかし、そこでいうところの「平仮名」とは、平安期成立の文献に「ひらがな」ということばそのものが確認されるということを以て語られているわけではない。現在のところ平安期成立の文献に「ひらがな」という用語の文献的徴証は得られていない<sup>1</sup>。つまり、平安期の人々が「ひらがな」という語を以て指示する仮名実態が存在した、というのは、いまだ推論にとどまる事柄である。

もちろん「推論」であったとしても、その推論プロセスの人文科学的蓋然性が高ければ、それは人文科学の常として、「ひとまず」信頼してよい。

この「平安時代の平仮名」という理解が成立する、その推論プロセスは、次のようなものと思量される。

1. 平安期成立作品に用いられている「ある文字」に、現代の平仮名との字形の連続性を見出し、
2. そして、それは視覚的に漢字ともカタカナともいえない、というネガティブな排除法的理解を以て、
3. そして更に、それが平安期成立文献によくみられる「かな」という用語に対応する引き当てを以て、
4. 現代日本社会で通用している「平仮名」「片仮名」「漢字」の三択から「平仮名」を選択。

しかしながら、この推論プロセスには大いに問題がある。それはもちろん、現代日本社会で通用している平仮名・片仮名・漢字の三択という選択肢が前提になってしまっている点である。結果として正しい可能性はもちろんあるけれども、そもそも仮名成立期という、いわ

<sup>1</sup> 現在のところ最古例は、山内洋一郎(2011b)が指摘する室町時代・応仁期の使用例である。

ば仮名成立の「胎動期」に、最初から現代の「安定期」の鼎立状態を当てはめて考えてよいものかどうか。

さて一方、「かな」と「ひらがな」が同一であるというのは自明ではなく、両者を区別する向きもある。

つまり、「かな」「ひらがな」両者の関係は、

1. 同一概念に対応するラベルの差し替え（平安期「かな」＝現代「ひらがな」）<sup>2</sup>。
2. 歴史的ステージで、システム変化の前後に登場する仮名システム同士<sup>3</sup>。

というこの二つの見方が極として存在する、ということになる。

繰り返しになるが、前者の理解は、現在の平仮名字体とその用語を通時的に遡って、同じ字体と見なされうる仮名字体を古くは単に「かな」と呼称している、という認識の下、現代人により理解しやすい「ひらがな」で言い替えていることになる。が、その認識自体の当否については、自明もしくは不問扱いにされている。この立場を記述的立場から理解するならば、学術用語としての「平仮名」が平安期の書記システムを語る上で有効である、と暗黙に認めていることと解される。が、検討のプロセスを踏まずして、そのような保証はもちろどこにもない。

一方、後者の立場は、「かな」から「ひらがな」への変化を、あくまでも書記システム上の変化と捉える立場であり、単純なラベルの差し替えとは見ない。

後者の理解が正しいかどうかは別として、用語が異なる以上、単純なラベルの差し替えではないと仮定した検討が必要であることは言うまでもないはずである。

史的事象の記述的研究とは、当該の時代に用いられた語を、当該の時代に用いられた意味・機能で解釈・理解することであり、そのためには、その意味・機能を探る方法が必要となる。言語学にとって「システム（体系）」とは、言語の意味・機能を浮かび上がらせるための説明概念・作業仮説であることを考えれば、まだ十分に検討されているとは言い難い「ひらがな」という用語理解に当たっても、強く後者の立場を取ることが当然要求されるべきこととなる。

近年、中世・応仁期の「ひらがな」の使用例（山内洋一郎2011b）や、平安末期の「最古の平仮名いろは」の出土資料（土師器、2012年1月報道、斎宮跡遺跡。2013年6月報道、平安京堀河院跡。）、9世紀後半遺構（藤原良相邸）出土の仮名墨書土器（土師器、2012年11月報道、平安京遺跡）が報告されるなど、「ひらがな」そのものについて深く議論すべき研究状況・時期になってきている。厳しく歴史主義に立ち、平安期の「平仮名」を書記システムの中で考える必要がある。

「ひらがな」は、現代におけるありふれた日常用語でありながら、同時に歴史的用語でもある。書記用語に限らず、その機能的意味はシステムによって左右される、という認識に立ち戻って考えるならば、現代と平安期では、そもそも仮名書記システム自体が異なっている以上、現代日常語的理解で、平安期の「平仮名」を理解することは、精確な歴史的理解に支

<sup>2</sup> 例えば「平仮名」は後世の呼称で、古くは「かな」「かなな」と呼ばれた」（築島裕「平仮名」『日本語学研究事典』）とする記述など。

<sup>3</sup> 例えば「仮名とは、現今の平仮名のもとになった表音文字の体系」（小松英雄1998：165）とする記述など。

障をきたす危険性を孕んでいる<sup>4</sup>。

以下の論述では（既に上でも用いているが）、名称としての平仮名は「ひらがな」、実体概念としての平仮名は「平仮名」とカッコ付きの用字違いで書き表わす。（仮名、片仮名についても同様）

### 3 仮名書記用語の関係

#### 3.1 現代の書記システムにおける「仮名」「平仮名」「片仮名」の関係

現代、仮名書記メディア用語として「かな」「ひらがな」「かたかな」という三語が存在し、その点で、現代は中世の仮名をめぐる用語状況と変わりはない。ただし、現代における「仮名」は漢字に対立する抽象的単位（「平仮名」「片仮名」の総称的表現）としてのみ存在し、「かな」の指示実体は、使用頻度の高い「平仮名」に大きく傾くにしても、「平仮名」か「片仮名」かのどちらかである。

少なくとも平安期における「かな」という語の使用実態から推す限り、平安期において「かな」がこのような意味で用いられていたとは考え難い。

#### 3.2 平安期の書記用語システムの復元

一口に「平安期」といっても400年の長きを一共時態としてみるのはいかにも無理があることは承知の上だが、ここでは当該期を、仮名システム成立期としての「平安期」と捉え、そして、そのシステムを当時の人々がどのようなことばで理解していたか、を考えることとする<sup>5</sup>。

そのためには平安期の資料および平安期に現われる書記用語を以て、書記システムを記述・復元する作業を行なう必要がある。その問題意識から、山田健三（2010）において主要な書記システム用語を整理したが、その結果を(1)に示す。

<sup>4</sup> 当該分野において近時刊行された大著、矢田（2012：13）では、「平安時代における仮名の呼称の例として、これまでの研究史では、これらの語を含む『宇津保物語』や『源氏物語』など仮名文学作中の例がしばしば議論の俎上に載せられているのであるが、これらの資料の文脈からそれらの語が示すものの実態を導き出そうとすることは、恐らくどれだけの検討を積み重ねたところで現状以上の目覚しい成果を上げるものではあり得まい。そもそもこれらの文献が著された時代に、現代と同じく文字種・書体・書風などを異なるレベルのものとして人々が厳密に峻別していたと無条件に前提することも出来ない」とし「術語の定義は、その研究分野の目的に応じて新たに定められれば良く、必要以上に過去の用例に拘泥することはない」とする見解を提示する。後段については条件付き賛成であるが、前段については、それが、歴史的用語の歴史的段階での意味への接近に対する否定的見解であるならば（そのように読める）、全く従えない。システム（体系）ということに対する見解の違いかも知れないが、システム（体系）とは説明概念・作業仮説であり、歴史的段階での、いまだ理解しえないシステムを明らかにするために、断片的情報であっても、システムを復元するための材料（この場合、宇津保や源氏などの仮名に対する言説）として扱いながらシステム復元を目指し、また復元作業のために、理解できているシステム（この場合、現代のような文字種・書体・書風などを異なるレベルのものとして捉えるシステム）を参考にはあっても、それは当然のことながら、単なるアダプトであるはずのものではない。また学術用語といえどもどのみち時代から自由ではない。

<sup>5</sup> 後述するが、平安期内においても、その仮名システムが変容したことは間違いない。

	書記メディア（文字）レベル	各書記メディアの諸書体
(1)	漢 字	真・行・草
	仮 名	男手・女手
	片仮名	—

(1)は、仮名成立期からほど遠くないと目される10世紀半ばに、その成立期がほぼ重なる宇津保物語に多く現われる書記関連用語を中心として整理した結果である。

本研究と関わり、従来の一般的理解と異なる点を簡潔に示すならば、「男手・女手は、それぞれ漢字や仮名といった書記メディア（文字）そのものを指す用語ではなく、ともに仮名の書体名称である」という点である。

宇津保物語が、ある仮名書体を「男（手）にもあらず女（手）にもあらず」（国譲上）と記しうるのは、当時の用語を用いていうならば（実際にそのような複合形での用例があるわけではないが）、仮名には「男手仮名」「女手仮名」とでも呼ぶべき両極の仮名書体が存在していたことの明確な証拠である。「男手」「女手」は、それぞれ男手仮名、女手仮名の略称、ないし書体名称による代替形と見なせる。

女手仮名は、仮名古筆などに見られる流麗な筆致の書体、男手仮名は上代仮名（万葉仮名）の楷書体（真書体）を指すことになろう。この両者は、単体の仮名書体の違いだけでなく、（それと連動して）運筆モードも異なる。男手仮名は放ち書き、女手仮名が連綿である。（以下の論述においても、男手仮名<sup>6</sup>、女手仮名という呼称を採用する。）なお上に用いた「上代仮名」という呼称の提唱を山田健三（2013c）で行ったが、この名称は原則的に上代における書記システムを共時態として捉える場合に適した名称と考える。平安期に於いても上代仮名はその内実（清濁・甲乙の書き分けなど、いわゆる「上代特殊仮名遣」に関わるもの）の変容はあっても継続して用いられ続ける。10世紀以降の平安期の書記システム内の呼称としては、この宇津保の例に倣って「男手仮名」と呼ぶ方が適当である。

さて、宇津保・国譲上の当該場面は、仲忠から届けられた手本をめぐって、数多くの文字関係の用語が登場する場面として夙によく知られているが、そこに「かたかな」は現われるものの、「ひらがな」は登場しない。この事実から単純には、「ひらがな」という用語の成立（もしくは平仮名システムの成立）はもっと遅れるか、もしくは、用語（もしくはシステム）自体は成立していたとしても、宇津保の当該の場面（文字手本）に相応しくないもの、のどちらかであることが推測される。

#### 4 書記技術システムとしての仮名称呼——「ひらがな」と「平仮名」の文献初出のズレから

上述のごとく、またよく知られているように「ひらがな」という書記用語の文献初出例は、現在知られているところでは、室町期（桃源瑞仙「千字文序」応仁2年）であり（山内洋一郎2011b）、平安期の用例はいまだ確認されない。

<sup>6</sup>「万葉仮名」という呼称は採らない。この名称が持つ問題点については、山田健三（2013b, 2013c）に論じた。

しかし、一方で、現在我々が用いている「平仮名」と（ほぼ）同字体の仮名单体を平安期に確認するのは困難ではない、という点は研究者にはよく知られた事実である。ただ現在我々が用いている「平仮名」と、女手仮名とは(2)のように、運筆モードと異体字率との違いが看取されるので、モードから切り離れた形で、現在の「平仮名」と同字体であっても、それを即座に「ひらがな」と呼んで良いかどうかは慎重に吟味する必要がある。なお、戦後の仮名改革で異体字率は1となったが、これは人為的操作に基づく強力な教育政策の結果であり、活字印刷の単体仮名レベルでもかなり後まで存在した「𛀀」などに顕著なように、永らくは「低」であり、そういった歴史的事実から、ここでは「平仮名」の規定要件として異体字率=1を必須としない。

	呼称	実体概念	運筆モード	異体字率
(2)	(おんなで) かな	女手仮名	連綿	高
	?	平仮名	放書	低

このように、女手仮名と「平仮名」の違いは、用いられる仮名字体の違いではなく、運筆モードと、異体字率（=仮名セット規模）にあると考えられる。

そこで、運筆モード=放書、異体字率=低、という条件を満たす「平仮名」を平安期の文献に求められるのであれば、その有り様から「平仮名」という仮名セットの存在を考えられそうである。

このように、本研究では「ひらがな」という用語の遡及文献探索というアプローチではなく、平安期に仮名システムとしての「平仮名」が存在しえたか、という観点から当該問題への接近を試みる。それは、仮名呼称は、単に仮名单体レベルでの見た目の問題ではなく、書記技術システムとして考えるべき、という問題意識に基づく。現在、手書きレベルで（場合によっては活字レベルでも）、平仮名单体の「へ」と片仮名单体の「ヘ」の視覚的区別は困難であるが、多くは書記システム上からの機能によって弁別可能である。書記システムの観点があって初めて、平仮名の「へ」と片仮名の「ヘ」の違いは説明されるわけである。

平安期において、連綿モードの女手仮名で書かれた文に、単体で現行の平仮名字体と視覚的に同一のものが現われたとしても、それを「ひらがな」と呼ぶことは（おそらく）なかったと思われる。

## 5 平安期の神楽歌謡文献にみる「平仮名」と「男手仮名」

さて、現行の平仮名字体に近似し、上述の条件（運筆モード=放書、異体字率=低）に当てはまる「平仮名」資料を平安期に求めてみると、古代歌謡譜文献の一部に、その存在が認められる。そのことの意味を理解するために、以下、平安期の神楽歌謡譜文献についてまず概観する。

### 5.1 平安期書写の古代歌謡譜文献

現在知られている平安期書写資料と目されている古代歌謡譜文献を以下に列記する。論述の便宜上、用字特徴に従ってA～Cの三類に分類して示す。



## A) 男手仮名部分（前半）と「平仮名」部分（後半）とに分かれる

- (a) 神歌抄（伝源信義筆、国宝、10～11世紀の写）
- <sup>7</sup>
- ：東京国立博物館蔵

## B) 男手仮名と「平仮名」が混在

- (a) 神楽和琴秘譜（伝藤原道長筆、国宝、10世紀末～11世紀初写）：陽明文庫  
 (b) 東遊歌神楽歌（平安後期写、重要文化財）：鍋島報効会徴古館蔵  
 (c) 承德本古謡集：陽明文庫蔵

## C) 男手仮名のみ

- (a) 催馬楽抄（天治二年〔1125〕奥書（別筆））：東京国立博物館蔵  
 (b) 重種本神楽歌：天理図書館蔵  
 (c) 催馬楽譜（伝宗尊親王筆、平安後期写、国宝）：鍋島報効会徴古館蔵  
 (d) 東遊歌風俗歌（平安時代後期12世紀）：鍋島報効会徴古館蔵

まず、全体の文字特徴を見ておこう。

A～C類全てに男手仮名が用いられていることから判るように、平安期の歌謡譜は、原則として男手仮名を以て記されるのが伝統であったと見られる。男手仮名をみのCグループよりも、書写時期の古いテキストの残るA、Bグループが、平仮名との併用のある点に注意されるが、この事実は、平安期のより古い時期において、男手仮名と平仮名との親和性の高かったことと窺わせるものと理解される。このことについては、後に詳しく考える。

## 5.2 歌謡譜文献が男手で書かれる理由

さて、平安歌謡が和歌集（古今和歌集、拾遺和歌集、古今和歌六帖）に歌謡同類歌として収められる例は決して少なくない（田林千尋（2009）参照）。しかし和歌集に男手仮名で書かれることはない。同じ歌であっても和歌集に収めるか、歌謡譜に収めるかで、その書記実態が大きく異なる。和歌集であれば、古今集高野切などに代表されるように女手で書かれ、歌謡譜であれば男手で書かれる。この違いは、大いに注意せらるべき点である。

歌謡譜が男手で書かれる理由は、歌謡譜がまさしく楽譜である点に求められるだろう。鎌倉期以降（「神楽本譜」（多久春〔1256–1344〕撰。尊経閣文庫蔵、など）、現代用いられている歌謡譜には、カタカナ書きで、声明のように節博士による旋律が付されているものがあるが、「平安期の譜は音楽の内容についての情報が乏しく、精緻な記譜をもつ神楽歌譜は、この時代（鎌倉時代）にまで下る」（遠藤徹（2004：123））とされる。しかしながら、その表記法のルーツは「それを使ってひとに音楽を知らせるためのものではなく、むしろ自分自身の心覚えのメモからはじまったものなのであろう」（増本喜久子1968：127）と推定されている。このことは西洋音楽の楽譜史において、歌詞に簡単な音楽情報記号をつけるものから、徐々にネウマ譜へと進展していく歴史と同様に解されるが、譜本において、女手仮名ではなく、男手仮名で書かれるメリットは、音楽情報の書き込み易さにあると考えられる。

<sup>7</sup> 従来11～12世紀の写とする見解があったが（小学館古典文学全集『神楽歌・催馬楽・梁塵秘抄・閑吟集』解説など）、現在はほぼ一世紀遡って考えられている。日本語史学の立場からは、米山恵子（1989, 1990, 1992）によって、当該資料が平安歌謡譜資料の中で唯一仮名違例のないことが指摘されており、現在の成立年代推定に従うべきと考える。なお本書の内題は「神楽哥」であるが、紙背に異筆で記された「神歌少」に依り「神歌抄」が採られている（古谷（1993：77））。

Aグループの唯一テキストであり、古代歌謡譜としては最古写本と目されている「神歌抄」には、延音記号（「引」や母音字の繰り返し記号）も、笏拍子ポイント表示記号（「百」）もなく、せいぜい小節線くらいしか見られない、音楽情報の少ないテキストである。しかしながら、楽譜の機能・歴史を上述のように理解するならば、記憶に頼る部分が多ければ、音楽情報を記さないだけのことで、必要とあらば記載できるフォーマットと考えることができ、神歌抄は歴とした譜本と考えてよいだろう。

### 5.3 Aグループについて：神歌抄

さて、その「神歌抄」。現在は東京国立博物館蔵で重要文化財指定であるが、今昔物語集等に雅楽の名手として知られる源博雅（延喜18年〔918〕—天元3年〔980〕）の三男、源信義の筆として、宮廷勤仕の地下楽家のひとつである安倍家に伝来するテキストで、神楽の最古写本である。

この歌謡本文は、全22曲の巻頭第1曲「北御門」から第7曲の「狭居張哥<sup>さいばり</sup>」までは、男手仮名のみで書かれているものの、第8曲「之名加取」以下は「殆ど平がなを一字一字切り離した単体で書かれている」（古谷稔1993：76）ことが一見して見て取れる。（稿末の図1・2参照）

本稿では、この神歌抄を中心材料として検討する。

## 6 神歌抄の「平仮名」の検討

### 6.1 男手仮名セットから「平仮名」セットへの交替

先に触れた通り、当該文献の用字は、(3)のように顕著な違いがある（図1・2参照）。

- (3) I：（第1曲～第7曲） 男手仮名  
II：（第8曲～第22曲） 「平仮名」

IとIIの違いは、現代の我々の用字感覚からは奇妙に映るものの、これが実態である。問題はIとIIの分布差に積極的な意味づけが可能かどうか、という点である。以下検討しよう。

まず、IIの歌謡本文が「平仮名」で記されているとはいっても、(4)に示すように、歌題までもが「平仮名」で記されているわけではない。訓字表記は当然としても、男手仮名が用いられており、「平仮名」用例は一つもない。

- (4) I：北御門、韓神、氣比哥、採物、韓神、倭舞哥、狭居張哥  
II：之名加取、薦枕、小竹波、宇恵津支、拳巻、太宮、美名止谷、蜚、千歳々々、伊津礼毛曾、湯立、吉々利々、得銭子、木綿作、朝倉

つまり、ここから、歌題に「平仮名」は使用できない／しにくい、という、男手仮名と「平仮名」の間に明確な区別意識の存したことが確認できる。

ここで、Iで用いられている仮名セットを男手仮名セット、IIで用いられている仮名セットを「平仮名」セット、と便宜呼称するならば、神歌抄の書写は、（伝承の通り源信義（源博雅の三男）その人であったかどうかは別として、）一筆と判断される筆致で、その書写者が男手仮名セットを用いて書写を始めながら、途中IIから「平仮名」セットへ移行した、仮

名セット交換をしたということになる。ⅠとⅡで使われている仮名字体および踊り字（Ⅰ：Ⅱ＝々：ゝ、【別表】参照）までもが明確に異なることは、両者の間に仮名セットとしての異なりが意識されていたことの徴証と見られる。

この両セットの異体仮名含有率から仮名セット規模を算定してみると（使用仮名種類数／（全音節仮名数－不出現音節仮名数）：異体仮名0＝仮名セット規模1）、(5)のようになる。

(5) (Ⅰ)男手仮名セット　：　53／（48－8）＝1,325

(Ⅱ)「平仮名」セット：　67／（48－1）＝1,426

となる。

両者間の仮名セット規模に大差はなく、ほぼ同規模の仮名セットによる交換であることも指摘できる。

このような仮名セット交換が可能であるということは、両者の対立関係がemicなレベルにないことを、ひとまずは示唆する。となると、両者の関係はeticなレベルのものと考えられ、「平仮名」セットは男手仮名セットの変異仮名セットである、という位置付けを、「ひとまず」想定することができる。

さて、両仮名セットが変異関係にあるとして、問題はその変異の質であるが、両者は、ⅠとⅡという分布のありようと、仮名セットとしての区別意識が見られることから、両者の関係は、自由変異とはいえず、この点から「平仮名」は男手仮名の環境変異である、という解が導かれる。

## 6.2 どのような「環境」変異か

しかし、「平仮名」を男手仮名の環境変異と規定してみたところで、問題はその「環境」とはどういったものか、ということである。音節ごとに整理した【別表】（稿末参照）に明らかのように、実際にはⅠにおいても、Ⅱで用いられる仮名字体が僅かに用いられているケースもあり、また、Ⅰ・Ⅱの間に大きな字体相違が見られないものもないではないが、全体としてⅠとⅡの視覚的差異・変更は大きい。

となると、ⅠからⅡへの「環境」の違いをどのように考えるべきか。

書道史研究者である古谷稔は、Ⅱでの筆致について、(6)のように述べる。

(6)…その書は、穂先のちびた筆によってきわめて素朴な筆致で淡々と書き進められ、何よりも読みやすいところに、他の古筆にない特異な親近感を抱かせる。…加えて、かなの歴史上、巧みな連綿体が生まれる以前のもので、草がなから平がなへと流行する過渡期の筆と考えられる。それは、之名加取の曲名までを万葉がなで書いていることにも注意したい。さらに想像をたくましくすれば、この「神歌抄」の原本が、もと万葉がなで書かれてあり、執筆に際し、巻頭から忠実に同じ書体で書写してきたが、当時すでに平がなが流行しはじめ、之名加取以下を、読み易い平がなの書体に急遽切り替えて書いたことが連想される。平安朝古筆の中には、一巻一冊の中に書写する場合、その中で書体の変化をつけるという故実にもとづく遺例もあるが、これはそうしたものと意味が違う。やむなく中途から平がなを所用したものと推測される。いずれにしても、書体と書風から見て、平がなが流行する直前の十世紀末の筆と考えられる。（古谷稔（1993：76－77）、下線山田）



古谷は、この共時面に、仮名の歴史的変化の痕跡を見ているようである。そういった通時的解釈自体が仮に正しいとしても、少なくともこの同一共時面に二種の仮名セットが共存する理由説明にはならない。当時流行の「読み易い平がなの書体に急遽切り替え」る／うる理由が何なのか不明であるし、また、そのことと「やむなく（中途から平がなを所用した）」とが、どのように結びつくのか、この文章だけでは真意を量りかねる。背景に「平仮名」流行があったとしても、ここに合理的な理由を見出すのは困難なようである。

そこで、別の観点から見てみる。

神楽歌は、神事に用いられる儀式歌謡であるため、全体構成を有する組曲仕立てに配置されている。現行の神楽歌は、大きく分けて、1) 人長式の部、2) 採物の部、3) 前張の部、4) 星の部、5) 雑歌（元風俗・催馬楽）の部、の五部構成と考えられる（cf. 増本1968: 308、など）。現行の神楽歌構成と平安期のそれが同じであるという保証はもちろんないが、譜の構成から見て、事実上大きな違いはなさそうである。この組曲構成を参考に考えると、ⅠとⅡの境界は、2) と3) の境界にほぼ当たり、「採物（内容は「榊」）・韓神」が2) 採物の部、「狭居張哥（内容は「木綿志天」）～蜚」が3) 前張の部、となる。厳密に言えば「狭居張哥」はⅠに属しているため、完全に一致するわけではないが、「採物歌は平安朝以来神楽の最も重要な歌で、神楽歌と言へばおよそ斯る性質の歌が主となつて来た」（西角井正慶1941: 38）「採物・韓神の曲がすむと、まづ神楽の一段落といった観がある」（同: 134）といった見解に従うならば、ここでの用字変更も意味あるものと解される。さらに、神楽歌は、唱和する歌い手が、本方と末方という二つのパートに分かれるが、Ⅱから本方と末方で歌詞の異なるものが示されていることも偶然ではないのかも知れない（図1・2参照）。

しかし、以上の解釈は、Ⅱから「平仮名」をを使う（心理的？）環境に入ったことを指し示してはいても、「平仮名」使用が義務付けられるようなものでは到底ありえない。それは、男手仮名と「平仮名」を混用する東遊歌神楽歌（鍋島本）では、このような分布は見られず、また、例えば神歌抄第9曲の「之名加取」は「しなかとる…」と「平仮名」であるが、これに対応する、東遊歌神楽歌（鍋島本）の「階香取」では「之奈加止留…」と男手仮名で書かれていることから明白である。

さて、このように、仮名セット変更の理由は不明ながら、書記システム記述の立場からは、先にもふれたように、ⅠからⅡへの切り替えは、男手仮名セットから、その変異仮名セットへの、セットとしての切り替えと見なされる。

但し、これまで用いてきたように、音韻論・形態論のアナロジーで「環境変異」という用語を、書記論に対して用いることが有効だとしても、音韻論・形態論のように、ある環境に於いてほぼ自動的に変異形に姿を変えると記述でき、同一音素の異音、同一形態素の異形態としうるものとは異なり、書記論の場合、（推定であったとしても）「急遽切り替え」る、という表現が可能のように、行為者の意志がより介入できるものであることは、音韻論・形態論とは事情が異なることは、当然のことながら注意をしておく必要がある。

この仮名セットの変更理由は、おそらく「変えたかったから変えた」という点にしか求められないが、それは、自由な等価交換ではなく、あくまでも男手仮名の代替位置に留まる。男手仮名だけの歌謡譜（C類）は存在しても、「平仮名」のみの歌謡譜が存在しないこと、

両者併存・混在の場合（B類）でも、男手仮名から優先的に用いられていること、神歌抄のようにⅡから大きく「平仮名」に変わるテキスト（A類）でも、歌題は男手仮名という点から見ても、男手仮名に優位性があることは間違いない。（このことは「ひらがな」の名義とも当然関わるはずのことで、後に検討する。）こういった点が、宇津保・国譲上の手本場面に「平仮名」が登場しない理由であるかも知れない。

つまり、この分布から、両仮名セットが環境変異関係にあるとはいいい得ても、その変異的表れが、行為者にとって抗し難いシステムとして存在しているわけではなく、かなりの程度まで、行為者がコントロール可能なものとして存在しており、行為者は両仮名セットをある程度自在に「渡る」ことができる、という、男手仮名からみて「平仮名」はそういう存在であったと解される。

このように考えてくると、先に「平仮名」を男手仮名の etic なレベルに置くべきものとした説明は正しくないことになる。精確には、むしろ男手仮名と対立する emic な存在でありながら、etic な存在として男手仮名側から「渡る」ことも可能、という両義的な存在ということになろう。

## 7 神歌抄の「平仮名」はジャンルを超えた存在として認められるか

さて、ここで、現在のところ、この神歌抄にしか観察されない「平仮名」状況を「特殊」なものとして扱うべきではないか、という疑念が当然想定されるので、その疑念を払拭すべく一言しておきたい。

まず、当然のことながら、我々が知りうる言語史的事象は、文献の徴証に基づく確かなデータと、確かな推論、その両方に依って復元・解釈される。

神歌抄にしか観られない「平仮名」を「特殊な使い様」と推論するのは、他に比すべき一般的な「平仮名」の使い様が存在することが前提であり、比すべきデータがない以上、それを特殊とすることは、そもそも論理的に成立しない。

もちろん、楽譜という書記テキスト形態自体が、限定的な用途を志向している、という意味でそこに「特殊性」を認めるのは可能である。よってそこに記される音楽記号が楽師という閉じたサークルにおいてのみ通用する記号であることは、そもそもそれらの記号が部外者には即座には感知し難く、解読という手続きが必要である、という事実をもって「特殊性」を主張することは当然可能である。

しかし、ここで問題としている「平仮名」による歌謡本文は、時代的にも部外者である我々が読めてしまう一事を以てしても、特殊でないことの明白な証拠である。

## 8 仮名書記用語システムの復元、「ひらがな」名義

さて、話を戻そう。

上述のように、仮名セットとして存在していながら、同時に男手仮名の変異セットでもある「平仮名」の存在を平安期に確認できた。問題は「ひらがな」という呼称の存在であるが、「平仮名」とすべき実態が存在していることからして、平安期に「ひらがな」という呼

称が存在していた蓋然性は低くない。

さて、山田（2010）でも述べたとおり、男手、女手は、仮名の書体レベルの用語であると推定可能なので、これらを合わせ仮名書記用語システムを復元してみると(7)のようになる。これらの呼称成立期に於いては、女手（仮名）と平仮名は、やはり同一視できない。(7)参照)

平仮名	—	仮名	—	片仮名	…	文字レベル
(7)		／ \				
		男手 女手			…	書体レベル

「かたかな」の「かた」は単に「片方」という意味ではなく、本来あるべきものが欠落しているという評価形容語と解すべきことはよく知られているが（亀井孝1941）、(7)としてまとめた対立関係から考えると、「ひらがな」も同様に「かな」の「ひら」という評価位置に存在するものと考えられる。

日本国語大辞典「ひらがな」の説明は「ひら」を「角のない、通俗平易の意」とし、また「ひら」を前部要素とする複合語の形態素説明で、多くの辞書は「ひら」に「たいら」という意味を認める。

しかし、辞書の意味説明が必ずしも原義説明を欲してはいないことを知りつつも、野暮を承知でいうならば、これは「ひら」の原義（中核的意味）説明としては適当ではない。「ひら」は、「枚」や擬態語「ひらひら」など同根の情態言とでもいうべき形態素／pira／であり、その中核的意味は、物理的／精神的な「薄さ」を示し、「たいら」はそこからの派生義と思われる。となると、「ひらがな」に物理的「薄さ」（thinness）は当然求められないので、「ひら」とはより精神的な表現に傾き、「かたかな」同様、「かな」から見て、ワンランク下であることを示す、いささか差別的・蔑視的ニュアンスを含む表現であったということになる。

## 9 「ひらがな」という語の成立期と「かな」の指示実体

さて、既に山田（2013b）等で触れたことではあるが、この「ひらがな」「かたかな」の「ひら」「かた」という形容語が冠される「かな」のその指示実体は、上代仮名（男手仮名）と考えなければつまり女手仮名と考えては、「ひら」「かた」の意味を了解できない。

「ひらがな」「かたかな」の語構成を考えた時、そこに含まれる「かな」の指示実体が「上代仮名（男手仮名）」であって初めて、これらの語の成立の合理的な説明が可能となる。「ひらがな」「かたかな」の語構成がそれぞれ、[ひら [かな]]、[かた [かな]] であることに異論を差しはさむ余地はない。主要部（head）に位置する「かな」を、補部（complement）の「ひら」「かた」という形容語が限定している。この状態を満足させる「かな」の指示実体は、当然「上代仮名（男手仮名）」であり、(8)のように理解するのが、合理である。

(8) 仮名：平仮名 = 安：あ、以：い、宇：う、…

仮名：片仮名 = 阿：ア、伊：イ、宇：ウ、…

このように考えるならば、両語とも「かな」という語が優先的に男手仮名を指していた時期に成立したことを含意する。

そして、このことは、同時に、いまだ文献的徴証が得られない二つの論点、つまり、古く（平仮名、片仮名、女手仮名、成立以前）男手仮名を「かな」と呼称した可能性と、平安期に「ひらがな」という語が存在した可能性をサポートする内部徴証でもある。

このように「ひらがな」「かたかな」という語は、その文献的徴証の有無とは別に、語構成システムを借りた内的再建（internal reconstruction）により、成立当時の様子を復元させて見せてくれる。

しかしながら一方、平安期内に「かな」の指示実体は変容を遂げたと考えられる。

これまで「かな＝女手」と見られてきたように、平安期の用例を見る限り「かな」の主要な指示実体は、すでに平安期内に、女手仮名にシフトしていき、男手仮名は、後世には「真名仮名」（藤原俊成『古来風体抄』（初撰本1197）、仙覚「仙覚抄奏覧状」（1253）、文明本節用集）、「万葉仮名」（本居宣長「玉勝間」（18世紀末）、誹風柳多留「みな出ると万葉仮名も付る所」、歌舞伎「名歌徳三舛玉垣」（1801））「真仮名」（本居宣長「玉勝間」、太田全斎（1797頃）「俚言集覧」）などといった様々な呼称が与えられるように（cf. 乾（2003）、山内（2011 a））、男手仮名が「かな」の中心的な指示実体を担ったのは、比較的短かったと考えられる。

が、しかし、短かったとしても、その時期に、「平仮名」の使用実態と、仮名用語のシステム、および語構成からみて、「ひらがな」という語は平安期に成立していた、と考えられる。

## 10 おわりに

結論は繰り返さない。以下、説き残した課題を示して終えたい。

平仮名と女手仮名との歴史的関係はどのようなものであったのか。本研究での理解が正しければ、平安期に平仮名と女手仮名は別のものとして共存していた、ということになる。しかし、当然のことながら、これは平仮名と女手仮名がそのルーツを異にするということを意味しない。問題は、神歌抄、宇津保物語成立と目される10世紀後半頃には、仮名用語として女手が宇津保に用いられており、更には、10世紀のものと目されている、伝紀貫之筆自家集切（東京国立博物館蔵）は、高野切ほどではないにしても、現在の我々が女手と呼ぶに相応しい流麗な筆致を示しており、それが「平仮名」とは別ものであったと考えられるということである。結局、平仮名は仮名のラベル替えでもなく、また女手仮名システムから派生した仮名システムでもなく、少なくとも10世紀には女手仮名と異なるものとして、書記システム内に存在したのと考えられる。

その後、女手仮名は「かな」の指示実体として優勢だった男手仮名に変わり、「かな」という名称を専用に担う中心的存在になっていく。

平仮名は、その「ひらがな」という語形とともに、表立った歴史からは姿を消すように見えるが、出土資料に見られるように、おそらく異なる位相では生き続けてきたように思われる。はたしてその実態はどうであったのか。

また、当該の例が、中世、いろはと近い位置に現われる「ひらがな」（山内2011 b）とはどのようにつながるのか、もしくはつながらないのか。まだ考えねばならないことは多い。

## 使用テキスト（複製本）

1. 神歌抄：東京国立博物館ウェブサイト公開カラー画像、『極秘 神楽歌 信義朝臣自筆』官幣大社稻荷神社、『神歌抄・神楽和琴秘譜（日本名跡叢刊）』二玄社
2. 神楽和琴秘譜：『神歌抄・神楽和琴秘譜（日本名跡叢刊）』二玄社、『古楽古歌謡集（陽明叢書 国書篇第8輯）』思文閣書店
3. 東遊歌神楽歌：『東遊歌神楽歌』（古典保存会）、カラープリントアウト紙（鍋島報効会）
4. 承德本古謡集：『古楽古歌謡集（陽明叢書 国書篇第8輯）』思文閣書店
5. 催馬楽抄（天治本）：『催馬楽抄』（古典保存会）、『天治本催馬楽抄（日本名跡叢刊）』二玄社
6. 重種本神楽歌：『極秘 神楽歌 重種注進』官幣大社稻荷神社、『古楽書遺珠（天理図書館善本叢書）』八木書店
7. 催馬楽譜：カラープリントアウト紙（鍋島報効会）
8. 東遊歌風俗歌：カラープリントアウト紙（鍋島報効会）

## 引用・参考文献

1. 乾 善彦（2003）『漢字による日本語書記の史的研究』塙書房
2. 遠藤 徹（2004）楽譜と楽書 『雅楽（別冊太陽）』平凡社
3. 亀井 孝（1941）片かなとその名義 『図書』昭和16年11月号
4. 小松英雄（1998）『日本語書記史原論』笠間書院
5. 田林千尋（2009）『古今和歌六帖』所収の平安期歌謡について（『国語国文』78-9）
6. 築島 裕（1981）『仮名（日本語の世界5）』中央公論社
7. 西角井正慶（1941）『神楽歌研究』畝傍書房
8. 古谷 稔（1993）『神歌抄・神楽和琴秘譜』（日本名跡叢刊）解説、二玄社
9. 増本喜久子（1968）『雅楽 伝統音楽への新しいアプローチ』音楽之友社
10. 矢田 勉（2012）『国語文字・表記史の研究』汲古書院
11. 山内洋一郎（2011 a）仮名の語史－仮字・仮名・真仮名・女手など－ 『国語語彙史の研究・30』和泉書院
12. 山内洋一郎（2011 b）ことば「平仮名」の出現と仮名手本 『国語国文』80-2
13. 山田健三（2010）「男手」考－宇津保物語の用例をめぐる平安書記システム記述－ 『日本語学最前線』和泉書院
14. 山田健三（2013 a）書記用語「万葉仮名」について『人文科学論集 文化コミュニケーション学科編』47（信州大学人文学部）
15. 山田健三（2013 b）仮名をめぐる歴史上の書記用語・再考 『日本語学』2013年月9号
16. 米山敬子（1989）『承德本古謡集』の仮名と音韻について『歌謡一研究と資料一』（歌謡研究会）2）
17. 米山敬子（1990）平安朝書写古謡集に見る仮名と音韻について：その一、『鍋島家本東遊歌神楽歌』－（『歌謡一研究と資料一』（歌謡研究会）3）
18. 米山敬子（1992）平安朝書写古謡集に見る仮名と音韻について：その二、－『神楽和琴秘譜』『信義本神歌抄』（『歌謡一研究と資料一』（歌謡研究会）4）



## 付 記

神歌抄の図版については、東京国立博物館提供のネット閲覧可能なデジタルコンテンツを利用させていただいた。テキスト本文を最大化するため、余白部分はカットした。同館の「デジタルコンテンツ無償利用条件」に従い、ここに明記する。なお、別表で用いた仮名字体の切り出しは、『神歌抄・神樂和琴秘譜（日本名跡叢刊）』（二玄社）のカラー図版を利用している。鍋島報効会（佐賀）には、同会所蔵の歌謡譜本について、カラープリントアウト紙の頒布利用をご許可いただいた。記して謝意を表す。

本稿の内容は、第107回訓点語学会（2012年10月21日、於東京大学山上会館）で「平安期日本語書記システムにおける「平仮名」の位置」と題して行った口頭発表に基づいている。発表直後に、需めに応じて執筆した啓蒙的な論考（山田（2013b））で主張内容の主旨について触れた。それゆえ、しばらく本稿は宙に浮いたような状態となり、その後の論考で、本内容に触れる際にも口頭発表時のハンドアウトを参考文献として掲げるしかなかった。が、今回、タイトルを変更し、若干改訂した上で公表することとした。大きな内容の変更はない。

このような次第で、時系列的には、山田（2013b）と同時期に置くべきものであるが、内容的には、その詳細な補遺版という位置づけで、公表に意味あるものと考えた。了解されたい。

なお、本研究成果は、日本学術振興会科学研究費助成（挑戦的萌芽研究）「「平仮名」の言語史的意味と変遷の解明を中心とする日本語書記技術史研究」（課題番号24652091）の助成によっている。

（2019年10月31日受理，11月15日掲載承認）





